

高齢中国帰国者の居場所づくりに関する先行研究の検討

—多様性を尊重した支援のために—

A Literature Review on Making Places for Japanese War Orphans and Their Spouses Who Returned from China :
to ensure a support system respectful of diversity

蒋潔程 (広島大学大学院総合科学研究科)

JIANG, Jiecheng Hiroshima University

キーワード：高齢中国帰国者、居場所づくり

1. 研究背景

1945年8月、ソ連軍の対日参戦および戦後の混乱のため帰国できなかった日本人が多数存在した。このような状況の中で中国に残ることとなった女性たちを「中国残留婦人」、孤児となり中国の養父母に育てられた人々を「中国残留孤児」と呼び、「中国残留邦人」と総称している。1972年の日中国交正常化以後、中国残留邦人の帰国が始まった。本発表では、1972年以後に帰国し、2017年現在65歳以上の「中国残留邦人」とその配偶者を高齢中国帰国者と定義する。

厚生労働省の報告書(2015)によると、中国帰国者の平均年齢は76.0歳、70歳以上の高齢者が93.4%で、中国帰国者は高齢化している。南(2009)は、国境を越境し、日本社会で生活する中国帰国者は来日し、法律や行政上では日本人ないし日系人として取り扱われ、その日常生活での習慣や言語などの文化的実践が中国的であると述べている。浅野・佟(2010)は、中国帰国者は日本語に不自由し、生活が貧困に陥りがちな状況であり、日本という社会で孤立していると指摘している。日本人だが日本語に不自由していることは周囲との関係構築が難しいことが推察される。また、言語・文化を共有することができる人たちも限られることから、高齢の中国帰国者は日々の生活の中で居場所がない可能性が考えられる。

厚生労働白書(2016)によると、高齢者と近所の人たちの交流が年々減少し、地域での活動等に興味を持っている高齢者のうち、その興味が実際の地域活動へと結びついていない実態がある。しかし、白瀬ら(2015)の考察によると、居場所づくりによって日本人高齢者の孤立した状況が改善できる。高齢中国帰国者の場合はどうだろうか。飯田(2013)によると、2014年に中国帰国者一世が地域で安心安全に生活できるように支援を行っていく夕陽紅の会が京都市伏見区で結成され、中国帰国者専用の介護予防教室を毎月一回開催している。すべての活動は中国語で行い、中国語の歌を歌い、中国の遊びをして身体を動かし、介護予防を行っている。飯田は、この介護予防教室は身体的な介護予防だけではなく、中国帰国者の居場所も提供すると述べている。

これまで中国帰国者をめぐっては、肉親捜し、日本語教育、就労、国家賠償訴訟、アイデンティティの形成等、多角的にさまざまな分野から研究が行われてきたが、高齢中国帰国者を対象にした居場所づくりの研究は少ない。法務省によると、将来、日本で老後を迎える外国人が増加する傾向がある。その中、中国国籍者も増えている。彼らの孤立防止のため、居場所づくりについて考え必要がある。中国で成長してきた高齢中国帰国者を対象に居場所づくりが孤立を解消することを明らかにできれば、今後多国籍化していくであろう高齢の在日外国人の孤立問題に一つの解決方法を提供できるものと考えられる。

本発表は日本人高齢者、在日コリアン高齢者、中国の東北地方の農村に住む中国人高齢者の居場所づくりについての先行研究を参考にしながら、高齢中国帰国者の居場所づくりに当たって必要なことは何かを検討する。

2. 研究目的と研究方法

本発表では、居場所づくりという視点から高齢中国帰国者に関する論文を整理する。石本(2009)は、「居場所」という言葉は一般に、「いるところ」などの物理的な意味に加えて「身を落ち着けていられる場所」などの心理的な意味も含めていると述べている。また、「居場所」を他者とのつながりの中で自分を確認できる社会的居場所と、他者から離れて自分で専有できる空間を取り戻せる個人的居場所に分類している。本発表で対象とする居場所は、物理的、心理的な意味で他人と関わる社会的居場所である。本発表では高齢中国帰国者を対象とする居場所づくりを行う際の条件を「物理的条件」と「心理的条件」の二つに分けた。また、日本人高齢

者、在日コリアン高齢者、中国東北地方の農村に住む中国人高齢者の居場所づくりについての先行研究も整理し、これらを踏まえて、高齢の中国帰国者の居場所づくりを考えたい。日本人高齢者、在日コリアン高齢者の居場所づくりについての先行研究は「在日コリアン高齢者」、「高齢者の居場所づくり」などのキーワードを使用し、CINII から 21 本を抽出した。中国東北地方の農村に住む中国人高齢者の居場所づくりに関連する文献は「黑龙江农村老人」（黒竜江農村老人）、「老年生活」（老年生活）のキーワードを使用し、中国知網（CNKI）から 2 本を抽出した。

文献の内容に基づき、居場所づくりの関連研究を「物理的条件」と「心理的条件」の二つのカテゴリーに分類してレビューする。「物理的条件」については、高齢の中国帰国者に関する論文の中に出てくる「言語」、「介護および他者との関係構築」、「経済条件」の三つのキーワードから分析する。「心理的条件」については、高齢の中国帰国者に関する論文の中に出てくる「生き甲斐」、「社会関係」、「アイデンティティ」の三つのキーワードから分析する。

3. 研究結果

「物理的条件」の分析から、以下のことが分かった。「言語」において、多くの中国帰国者は言葉の壁から孤独等の問題が生じている。「介護および他者との関係構築」について、在日コリアン高齢者にとって、彼らの言葉、食事、生活習慣等に配慮する介護施設が彼らの孤独の状況を改善する可能性があると考えられる。しかし、高齢中国帰国者を対象とした類似の研究は少ない。また、日本人高齢者の場合居場所づくりにより孤立した状況を改善できるとの報告がある。しかし、高齢中国帰国者を対象にどうすれば孤立した状況を改善できるかを調査した研究は少ない。「経済条件」を見てみると、高齢中国帰国者、在日コリアン高齢者とも貧困に陥りがちである。高齢中国帰国者の経済状況は、彼らの居場所に対してどんな影響を与えるかを探求すべきである。また、高齢中国帰国者の居場所を考える時、彼らの経済状況に配慮すべきである。

次に「心理的条件」を検討する。「生き甲斐」については、中国東北地方の農村に住む中国人高齢者は「孫の面倒を見ること」をレジャーの一種と考えており、「孫の面倒を見ること」が彼らにとって楽しみであると考えられる。中国帰国者の多くは中国の東北地方の農村で育っており、現在中国東北地方の農村に住む中国人高齢者と同じ価値観を持つ可能性がある。しかし、これに関する調査はほとんどない。中国東北地方の農村に住む中国人高齢者は、経済状況の改善により高齢者の幸福度も上がるという考察があった。しかし、高齢中国帰国者の場合、経済状況の変化と幸福度の関係性は解明されていない。「社会関係」については、蘭（2000）は、多くの残留孤児は、日本社会の中で孤立していて家族や親族という狭いネットワークの中で生きているのが現実であると指摘している。「アイデンティティ」については、張（2011）、佟・浅野（2011）による、中国帰国者は多様なアイデンティティを持っていることが分かった。しかし、多様なアイデンティティを持っている中国帰国者に対して、居場所づくりを考える際にどのような配慮が必要かを明らかにした研究は少ない。

以上から、高齢中国帰国者の居場所づくりを考えるには、彼らの生活実態や経済状況等を調査し、彼らのニーズを明らかにする必要がある。加えて、中国帰国者が有する歴史的な背景を理解したうえで、彼らの言語、食事、生活習慣等に配慮して、居場所を作ることが必要であろう。今後、広島市に住む高齢中国帰国者を対象に、彼らの生活実態や経済状況等を調査し、彼らのニーズを明らかにする。その上で、高齢中国帰国者を対象にする居場所の意義と在り方を考察したい。

【主な参考文献】

- 1.厚生労働省（2015）「中国残留邦人等実態調査結果報告書」http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/101029-04_kekka.pdf（2017年10月20日閲覧）
- 2.佟 岩・浅野慎一（2011）「孤立と差別：永住帰国した中国残留日本人孤児の家族・社会関係」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 4（2）：171-192